

第6回 谷根千

耳鼻咽喉科・頭頸部外科フォーラム

日時 2019年9月14日(土) 16:50 ~ 19:00

場所 東京ガーデンパレス 3階「白鳳」

住所：東京都文京区湯島1-7-5 TEL:03-3813-6211(代表)

参加費 1,000 円

情報提供 「非鎮静性抗ヒスタミン薬の最新情報」 田辺三菱製薬株式会社

テーマセッション 17:00 ~ 18:00

座長：後藤 穰 先生 日本医科大学付属病院

「アレルギー性鼻炎 最近の話題」

演者： 村上 亮介 先生 日本医科大学付属病院
若山 望 先生 日本医科大学武蔵小杉病院
細矢 慶 先生 日本医科大学千葉北総病院

講演 18:00 ~ 19:00

領域講習

座長：長谷川 賢作 先生 日本医科大学千葉北総病院

「耳科診療・耳科基礎研究と唾液腺診療

～今後の展望を含めて～

演者：松延 毅 先生 日本医科大学付属病院

※ 専門医講習受講登録が必要な方は「[日本耳鼻咽喉科学会会員カード\(ICカード\)](#)を必ずご持参頂きます様お願い申し上げます

* 講演会終了後、意見交換会を予定しております。

マイカーでご来場の際には、意見交換会での飲酒はお控えくださいますよう、お願いいたします。

共催： 橘鏡会・日本医科大学付属病院 耳鼻咽喉科・田辺三菱製薬株式会社

アレルギー性鼻炎最新の話題 日本医科大学付属病院 村上亮介

2014年からスギ花粉症に対する舌下免疫療法が保険適用となり、2015年からはダニアレルギーに対する舌下免疫療法も行えるようになった。

舌下免疫療法はアレルギー性鼻炎の自然経過を変えることができる唯一の治療法と位置づけられており、医療者のみならず患者からの期待も大きい。

しかし、年単位の治療が必要であり、20-30%に無効例が存在するが、実臨床で可能な客観的な治療効果判定や効果予測の方法が無いのが現状である。また、舌下免疫療法の併用療法についても標準的な方法が確立されておらず、その確立も望まれる。

今回、当科舌下免疫療法外来で治療中の患者にアンケート調査を行い、患者の満足度やニーズを確認しながら、上記舌下免疫療法の問題点について報告する。

アレルギー性鼻炎の治療 —外科的治療法— 武蔵小杉病院 若山 望

鼻アレルギー診療ガイドラインにおいては、手術療法の基本的スタンスとしては「反復する発作の結果、粘膜が不可逆的に変化し薬物に抵抗する症例に用いられる」と記載されている。加え「鼻の機能保存省みずに破壊的な手術を行うのは慎まなければならない。」とも述べられている。鼻閉に対する手術としては鼻中隔矯正術に加え、下鼻甲介に対する手術が行われている。鼻甲介は、整流や加湿、加温および繊毛運動、IgA分泌などの免疫機能を果たしている。そのため、下鼻甲介に対する手術においては、様々な手法があるが、手術法の選択においては十分な注意が必要と考えられている。また、鼻汁・くしゃみに対しての手術療法として、旧来はVidian神経切断術が有効とされていたが、ドライアイや三叉神経痛といった合併症の問題や、手技が煩雑さから現在はほとんど行われなくなった。その代わりに、1990年の後半より普及したのが後鼻神経切断術であり、現在本邦において多数の施設で行われるようになっている。今回、アレルギー性鼻炎の手術療法として、下甲介に対する手術および後鼻神経切断について、現状及び文献的な考察を含め報告したい。

留学報告とアレルギーの免疫学的話題 千葉北総病院 細矢慶

アレルギー性鼻炎の有病率は近年増加しており、日本国内でおよそ30%といわれ社会問題化している。アレルギーは上皮細胞が傷害を受けると、IL-33などのサイトカインを放出し、Th2細胞、さらにはマスト細胞や好酸球が刺激されることで様々な症状が生じる。鼻では、鼻水・くしゃみ・鼻閉などの症状となりアレルギー性鼻炎を、肺では気道平滑筋にも作用することで咳・痰・呼吸困難などの症状となり喘息を引き起こす。アレルギーは免疫の防御と寛容が崩れたときに引き起こされる。自己を攻撃しない免疫寛容の機能をもつ制御性T細胞は、Th2細胞を抑制しアレルギーをおさえる重要な役割を果たしていることが知られている。2016年8月からのフランス、リールのInstitut Pasteur de Lille留学中に我々のグループは制御性T細胞の役割に注目し、ハウスダストマイトを用いた喘息モデルマウスを使用してアレルギーの研究を行なった。制御性T細胞内の核内受容体の1つがアレルギーを抑制するのに関わっていることを突き止めたのでここで報告する。

耳科学臨床と基礎研究および唾液腺の臨床
---今後の展望を含めて---
日本医科大学耳鼻咽喉科学教室 松延 毅

演者は卒後23年が経過し、臨床では耳科学・聴覚医学、唾液腺疾患の臨床を主に行ってきた。また、基礎研究としては耳科学の分野で急性音響外傷における内耳障害のメカニズムの解明、新規治療法の開発を行ってきた。本講演では、演者のこれまでの臨床・基礎分野への取り組みを紹介し、当科における展望につき概説させていただく。

①耳科学・聴覚医学

真珠腫性中耳炎に対する術式では、限局例(小児先天性真珠腫を含む)においては、外耳道後壁保存型鼓室形成術を採用しており、TEES (Transcanal Endoscopic Ear Surgery)(経外耳道内視鏡下耳科手術)も導入予定である。伸展例でも可能な限り、canal wall upで行い、再発が疑われたり危険側頭骨の症例では症例に応じて腔非開放型鼓室形成術+乳突腔充填術や耳道後壁削除・乳突腔開放型鼓室形成術を採用している。あぶみ骨手術では経外耳道的に行い、CO2レーザーを用いるLaser Stapedotomyを基本としている。

また、超高齢化社会に突入し聴覚管理の重要性が社会的に増大していることを受け、補聴器・人工内耳・中耳等の人工聴覚器を積極的に行ってゆきたいと考えている。

②また、演者がこれまで行ってきた基礎研究についても簡単に紹介したい。

③唾液腺内視鏡

唾液腺内視鏡は演者が最も早く本邦に導入したものであるが、唾石症・狭窄など唾液腺良性疾患に対する低侵襲治療の現状を紹介したい。